

昭和四十八年(一九七三年)十月に日本で開く国際インターナショナルデザイン団体協議会(ICSID)の国際会議の誘致で、国にお金を出して

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
司 憲 庵 久 栄
司 憲 庵 久 栄

②

た。おかげで「デザインイヤー」運営委員会」ができて、会費を兼ね、前年に第二回日本インターナショナルデザイン会議を東京で開催。同時期にICSIDの理事會を京都で開き、進行状況を目的の当たりに見せた。京都・宝ヶ池の国際会館もできたばかりで、IC

スティーで、京都の市民を巻き込むのが目的だ。会議参加者のため自転車振興會を通じ八百台の自転車を用意した。色は明るい萌黄で、京都デザインセンター(現GK京都)が担当した。市内に駐輪スポットを多数設け、いつでも取りにいけるようにした。京都市内はやたらに会議の自転車が目立った。

「物に心あり」世界発信 36カ国参加、市民巻き込む

と云う。一瞬絶句したが、「借る人のみ分かる世界だ」と説明した。それは、正解だ。今でも思っている。この時は副会長に選ばれた。その年の暮れ、GKは第一回箱根會議を持った。我々も約四十人が集まった。

SID一行は受け入れ態勢に満足して帰っていった。翌年、京都の世界インターストリアルデザイン會議には、三十六カ国から約四百五十人、国内を入れると約二千二百五十人が集まった。會議は三部門に分け、一つは會議をするコンGRESホール。二つは目が作品を並べ、パフォーミングを見せる仮設のコンGRESプラザ。三つ目がコングレ



京都デザイン會議で英國代表から記念の盾を受け取る。部で上海に分室がある。十三年前、私の講演を聞いた中国の大家電メーカ、海爾(Hi-Air)の張瑞敏代表からデザインを手伝ってほしいと言われた。八年前に合弁会社を作り、冷蔵庫、洗濯機、テレビなど家電や携

もらうのは大変だった。通省からは初め、「クラス會にお金は用意できない」と言われた。ならば、その年を全額デザインイヤーにし、その一環として、ICSIDの會議を位置づけたりどうかと提案した。実際、国レベルの問題だっ

會議のテーマは「人の心と物の世界」。梅棹忠夫さんが「日本文明は西歐から輸入したように見えるが、そうではない。その一つがものに心ありだ」というような基調講演をしてくださった。會議が終わり、米国の大学教授である友人アーサー・ブイロス氏がコーラの瓶を持ってきて、「憲司、この瓶のどこに魂があるのか教えてくれ」という自由な語り。會議で語られたことで、GKにとっていいことは、翌年の新しい方針として加える。以後、場所は箱根に限らず、年末の會議はいまだに続いている。昨年は京都で開かれ、米國、オランダ、中国など海外も含め、